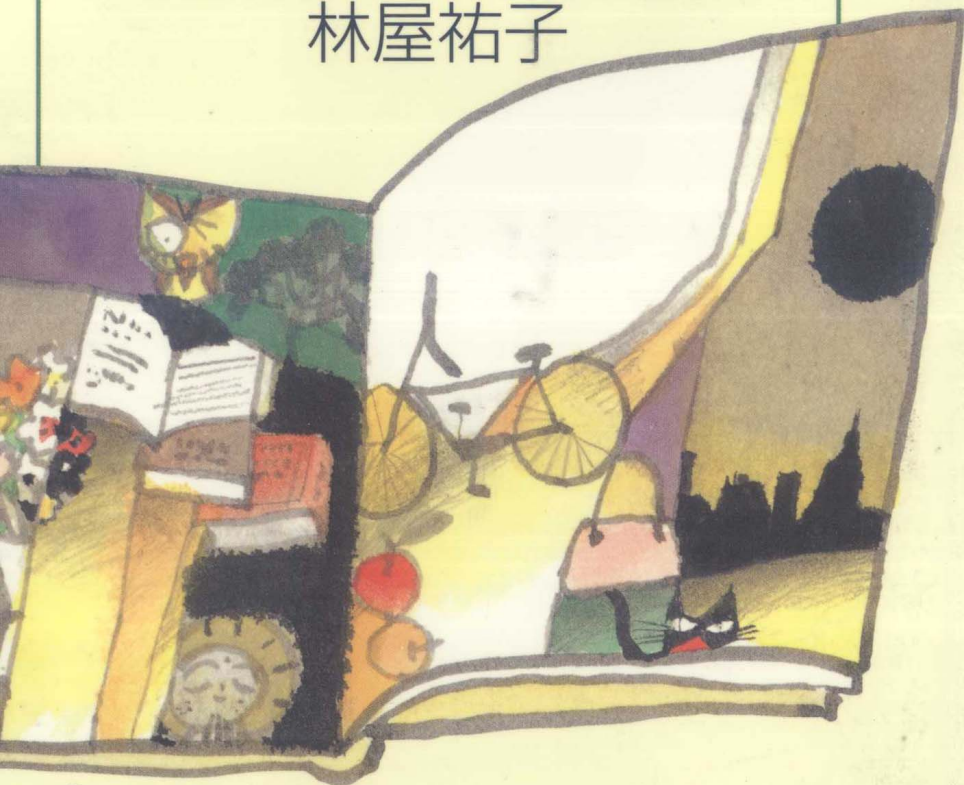


第8回北九州市自分史文学賞大賞受賞作

最後の卒業

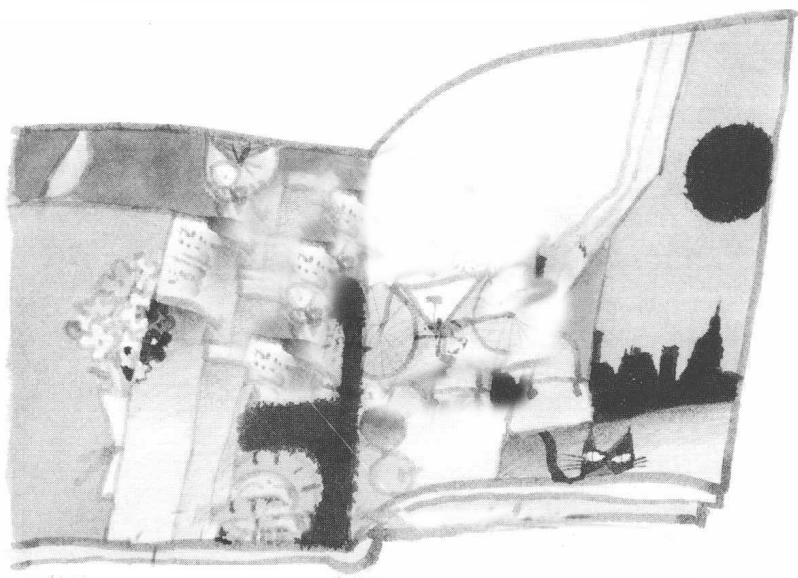
林屋祐子



MUR-982

最後の卒業

林屋祐子



学習研究社

林屋祐子 (はやしや・ゆうこ)

1970年9月、京都府生まれ。93年3月、京都府立大学文学部史学科卒、京都新聞社入社。97年3月、京都大学人間・環境学研究所修士課程修了。3年かけて修士課程を修了するまでの心の揺れ動きと周囲の人たちとのふれあいをつづった作品で北九州市自分史文学賞大賞を受賞。これまでの大賞受賞者の中で最年少。「大学院に行くにあたって、いろいろな人が親切に助けてくれたことを忘れたくなかった」が書く動機になったという。著名な歴史学者林屋辰三郎氏は大叔父にあたる。

最後の卒業

1998年6月1日 第1刷発行

著者—— 林屋祐子

編集人—— 佐藤秀三

発行人—— 堺光一郎

発行所—— 株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5 郵便番号145-8502

電話・東京(03)3726-8111

印刷所—— 日本写真印刷株式会社

製本所—— 牧製本印刷株式会社

© KITAKYUSYU CITY 1998 Printed in Japan

無断転載・無断複写複製(コピー)を禁ず

☆この本に関するお問い合わせは、次のところへお願いします。

・電話の場合は、

a. 編集内容について：編集部直通 03-3726-8201

b. その他：学研お客さま相談センター 03-3726-8124

・文書の場合は、

「お客さま相談センター」

〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15

☆ご注文、在庫のお問い合わせ

・ご注文は、お近くの書店様へお願いいたします。

・書店様の在庫のお問い合わせやご注文は、受注センター (048-479-1101) へ
お願いいたします。

169110 ISBN4-05-400971-9 C0093 ¥1500E

最後の卒業

「目次」

一章●きつかけ……………	5
二章●困惑の日々……………	23
三章●ナイシヨでお休み……………	46
四章●贅沢な授業……………	63
五章●私の居場所……………	88
六章●孤独な闘い……………	108
七章●秋……………	127
八章●留年……………	130
九章●手がかりを探して……………	152
十章●走る……………	178

装画 村上 豊
装幀 斉藤和代

この春まで私は、公的な身分を二つ持っていた。

一章 きっかけ

その朝、人けのない会社のロビーで、私は三人の男に囲まれて座っていた。一人は自分の所属する部の長、もう一人はその部を統括する局の長、残る一人は、直属の上司ではないが、その局の顧問的立場にあって、私にも常に仕事上の助言を与えてくれている人物だった。家族関係にたとえれば、父と祖父と叔父というような感じだろうか。彼らは重々しく、私がそ

の会社の社員という立場のままで、一般の大学院に学生として通うことを（正確にはそのための試験を受けることを）許可した。

——前例のないことであり、何かと問題が起るかもしれないが、人事部にはこちらから説明しておく。

——有給休暇や自己啓発休暇を使えば、授業の出席もこなせるね。

——なんにしても、まずは試験に受かることだな。

全体にきわめて好意的な彼らの言葉を聞きながら、私はただひたすら、どうしてこんなことになってしまったのかを考えていた。

数日後に私は合格通知を受け取った。一般企業に在籍する者は、入学手続きの際、（今後、大学院側に迷惑がからないように）所属長の通学許可を示さねばならない。特例のせいか所定の書式はなく、自分で適当に作成した「通学許可証」にさきの所属長の認め印をもらいながら、私は今後の自分の行く末を思いやっため息をついた。合格という響きのよい言葉に

連想される輝かしい気分は、このときの私には無縁であつた。

それからほどないある夕方、私は小さな部屋に同年代の人たち四、五人と並んで座っていた。私たちの前には長テーブルがあり、向かい側には背^せ広^{びろ}ネクタイ姿の紳士が六、七人、いやもう少しいただろうか。そのうちの一人が、大学院への私たちの入学を許可する旨を述べ、これからしつかり頑張るようにと激励の言葉を添えた。入学式が挙行されているのであつた。

そこはいかにも臨時の式場で、花もなければ白布も看板もなかった。なにより式場そのものが、大きな学舎の片隅の、古ぼけた小教室でしかなかった。にもかかわらずその場には、不思議な力強さがみなぎっていた。入る側にはこれから進む学問の道への、迎える側には新しく生まれた講座に對しての静かな熱意があり、その二つがこの場で融合して、一つのベクトルを作りだしているように思われた。——私一人は例外であつた。私は自分一人が観客となり、彼らの式典を見守っているような、なんだか場違い

な気楽さと戸惑い^{とまじ}を、その時間の最初から最後まで感じていた。

この間、私のもとには各方面から「祝合格」の声が届いていた。家族は無邪気^{むじやき}に喜んでゐる。親戚もよせばいいのに、わざわざ合格祝いなんかを包んで持ってきてくれる。それだけではない。あまり表沙汰^{おもてぎた}にはしないほうがいい、という上司の判断（私自身もそう思った）に基づいて、周囲には完璧に伏せていたにもかかわらず、社内でも秘^{ひそ}かに「すごいねえ」などと言ってくる人々が現れた。多くは全然違う部署の見知らぬ人ばかりである。私はまず、入社一年目の自分の顔をそんな他所^{よそ}の人が知っていることに驚いたが、いずれにしても今回は、ほめられればほめられただけ、気分が減入^{めい}っていくように思えた。私にとってこれは少しも、正当な栄光であるようにには思えなかったからである。

私が大学院に行きたいと思ったのは、会社をやめたいと思ったからである。なんとという低いところざしであろうか。現実逃避以外のなにものでも

ない。しかも、仕事をやめて、ぶらぶらしてるのももったいないので大学院へ、という世間によくあるパターンではない。もっと計算的である。会社をやめて別の仕事につくにはこういうところに行つといたほうが有利ではないか、と判断したから行こうとしたまでのことだ。

つまり、会社をやめたい↓でも職を失うのは不安だ↓キャリア・アップしておけば次が確保できるかも、という思考の流れから、「大学院は会社をやめるための必要条件」Ⅱ「大学院へ行くなら会社をやめてもいい」というような結論を導き出し、それに従って動いてみたわけなのだ。

やめたいと思いはじめたのが入社 of 年の晩秋で、年を越す頃には既にその気持ちには、「やめるぞ」という意志的なものに変わっていた。年が明けて間もないある日、会社の会議室のそばで、私は一人の男性に声をかけた。彼は大きな美術館の要職にある人で、普段なら新米の私ごときが気安く話しかけられるような相手ではなかったが、この時期の私は、既に会社生活

全般に關しておそろしく投げやりになっており、そのぶん何者をも恐れな
い不遜さに満ち溢れてもいた。何をしようが、「だから何？」といった感じ
である。いずれ私はこれから去る人間なのだ。相手が美術館の主要人物ど
ころか、社長だろうが総理大臣だろうが少しもかまうことはなかった。

私の話しかけた相手は、美術関係の会議に出席するためにこの会社へ来
て、会議の休憩時間にロビーへ出てきたところであつた。

——美術館に勤めるのは難しいですか。私の不意の質問に彼はおやとい
う顔をしたが、こだわらない性格の人らしく、なんでまた？ と聞き返し
ながら煙草に火をつけた。私は適当に、大学生の妹がその方面に進みたが
っているのだなどと嘘をついた。「難しい」と彼は言い切つた。「希望者は
多いが、使い物にならんと雇えんからな。妹さんの専攻は？」私は自分の
専攻科目を言つた。「歴史か。それ以外に美学は勉強してるか？ 美術館な
ら絶対いるぞ。それも院レベルだ」——私の頭のなかに、大学院という言葉
葉が植えつけられたのはこの時である。「院ですか」「おう。最低でもマス

ターは出てないとな。いまどき学部卒ではどこも雇わんよ。」

会議の再開時刻になり、彼は煙草をもみ消して立ち上がった。まあ諦めずに頑張るように妹さんに言つといて、との言葉を自分へのものであるとして受け取りながら、私は仕事そっちのけで頭を巡らせた。そうか、とりあえず必要なものは大学院だ。

実際にはこのとき、美術館という職場が私の望みそのものだったわけではない。ただ、次をどこにするかと考えるに当たって、現在の職に就く前に考えていた職業をいくつか思い出した中に、美術館や博物館の学芸員というものがあり、その矢先にたまたま美術館の彼を見かけたから、物は試しと思ってアプローチしてみたというだけのことだ。だが彼の明快な答えは、生まれつき面倒くさがりの私には天啓のようなものであった。事の困難さはさておき、これをやるにはこれが必要、という一つの手順が示されたのである。ルールが敷かれれば考えることは必要でなくなる。会社をやって博物館か美術館に勤める。そしてそのためには大学院卒の肩書が必要。

これで行こう、と私は思った。あとは汽車を走らせるだけであつた。

その日から、私は汽車を走らせるためのさまざまな試みを始めた。ガイドブックや参考書で情報を集めると同時に、相談相手として有効そうな人を物色するのである。大学院は学校の一種だから、頼る先も学校の先生が妥当そうである。同時に美術館や博物館の関係者にもひとあたり運動してみれば、思いがけないいい口が見つかるかもしれない。

具体的な行動を起こし始めると、思考も前に進んでいく。私の頭のなかに、とりあえず会社をやめて、それから一年ぐらい独学で勉強し、来春に大学院を受験する、というイメージができあがりはじめた。大学院受験マニュアルを買って読むと、世間には秋期に入試を行う院も少なくないらしい。うまくすれば、浪人期間は半年ですむかもしれない。昔から試験というものが嫌いでなかった私にとって、さまざまな学校の資料を取り寄せてどこを受けるか検討するというのは、けっこう心弾む作業であつた。

基本に戻って考えれば、実際のところ、私は「会社をやめたい」の一心ですべての活動を始めたのだし、それだけが私の切なる願いであった——つまり、会社さえやめられれば私はそれで満足だったはずなのだが、作業のうちに私のなかで、「頑張って勉強して、大学院に行つて研究者（学芸員）になるぞ」などという大きく間違つた考えが育つていった。研究者というのはそれになること自体が重要なのではなく、何を研究するか（自分で研究したいテーマを持つているか）ということが肝心だというのに、そんなこと私はてんから考えてもいなかった。

このあたりにそろそろ過ちの芽が窺^{うかが}えるのだが、当時の私はとりあえず、当面のプランが建てられたことに有頂天になっていた（私は昔から、計画を建てるのが好きであつた）。その有頂天のまま軽率に突つ走つて、やがてどんどん誤つた路線を拡大していくのだが、とにかくこのときはまだ私は、まず会社をやめて、それから大学院、という順序で進むつもりでいた。まさかここに、大学院には入学できたが会社生活も存続する、などという事

態が発生するとは思ってもみなかった。とんでもない大誤算が生じたものである。

天はよく見ているということなのかもしれない。単に会社をやめたいだけのくせに、それを研究者になりたいなどという高邁な口実にすりかえて正当化し、いかにも熱心な学問の徒のような顔をしてさりげなく流れを乗り換えようとする私に、「そんなに学問がやりたいのなら仕事をしながらでもやれるはずだろう。やってみるがいい」とばかりに、明らかな鉄槌が下されたのである。私はまるで、神を欺こうとして逆にひどい目にあわされ、「こんなはずではなかった」と叫ぶ、昔話の愚かな翁のようであった。事実、そうされるだけのことを私はやってしまっていたからかもしれない。

とにかく情報収集だと決意したその日から、私は日夜大量の手紙を書いた。宛て先は高校や大学の恩師たち、そして博物館や美術館に関係のありそうな親戚や知人である。私は知識の持ち主に「教えて！」と頼るのが好